

西アフリカの地域構造と世界

嶋 田 義 仁

はじめに

東南アジアには、個人的には非常に思い入れがある。私の研究の出発点には、日本の固有信仰研究があり、その基礎として稲作文化を考えていたからだ。日本文化の基層を餅や赤飯、酒という稲作文化を中心に考えれば、東南アジアにはプロト日本文化が残っているのではないかと、東南アジア研究センターの研修会に参加したこともある。たまたまフランス政府の留学生試験に受かり、アフリカを専攻することになったが、パリに渡るにあたって東南アジアを経由している。当時、低開発国と言われた東南アジアは、非常に魅力的に思えた。特に、バンコクからチェンマイまでは、冷房、美人バスガイド、トイレ、食事付きというバスが走っていて、快適な旅を経験した。一方、パリからはモロッコの南のはてに行くバスが出ていた。東南アジアと同じようなバスの旅を期待して乗り場へ行くと、寂れた工場街に幌をつけたみずばらしいバスが止まっていた。モロッコからフランスに來ている移民者用のバスで、乗ってくる人達も労働者風の人達ばかりだった。東南アジアとアフリカの落差を感じながら、モロッコへ行った記憶がある。

東南アジアとアフリカの落差は大変大きいと思う。東南アジアの発展は凄い。私が最初に東南アジアを訪れた1978年の当時は、まだNICSということも言われていなかった時代だが、その頃から発展する東南アジアを強く感じた。東南アジアのすさまじい発展とアフリカの後進性という大きな落差がどうして生じたかという問題が、私にはずっと気にかかってきた。その回答を少しでも得られるような形で、西アフリカの地域構造と、東南アジアも含めた世界的な構造を考えてみたいと思っている。

1. 西アフリカの南北構造

まず西アフリカの南北構造を捉えておきたい。西アフリカはサハラ砂漠から南に進むに従って熱帯雨林になる。西アフリカの自然環境は南北に乾燥から湿潤、砂漠からステップ、サバンナ、森というきれいな層状の構造によって特徴づけられる。東アフリカには1000m級の高原があり、本来ならば熱帯雨林になるような所も、高原であるためにサバンナ状を呈している。しかし、西アフリカには非常にきれいな南北構造があり、北部内陸乾燥地帯と、南部湿潤海岸地帯に大きく分けることができる。これは同時に文化的な南北構造の基礎ともなり、サハラ砂漠近辺の北部はイスラーム化されているが、南部はイスラーム化が進まず、いわゆるアミニズム

の世界だった。だが後に、ヨーロッパ植民地主義の進出が海岸地帯から行われたため、かつてのアニミズム世界の大半はいまではキリスト教化された地域となっている。

伝統的には北部乾燥内陸地帯は非常に豊かな土地であり、南部湿潤海岸地帯は貧しい未開の土地であった。この差はエコロジカルな要因で半分が説明できる。ステップ・サバンナ地帯では家畜飼育が可能である。だが、熱帯雨林や湿潤サバンナ地帯ではツェツェバエなど様々な病原菌が増え、家畜を飼うことは困難になる。それでもヤギは病気に対して頑丈な動物で、熱帯雨林に近い場合でも飼育可能だが、ヒツジやウシは飼えない。ヒツジやウシは砂漠のような乾燥しすぎて水や草のない所に生育できないことは誰にも想像がつくが、湿潤すぎるサバンナや熱帯雨林にもいない。伝統的には年雨量600mmぐらいがヒツジやウシ分布の南限になる。ただしその後、焼畑などによって害虫類が減少し、森林がサバンナ化したり、最近では殺虫剤の効果によって、ヒツジやウシの分布は南に下がってきている。

さらに農業では、ステップ・サバンナ地帯は穀物農業が行われており、トウジンビエやソルガムなどが作られている。しかし年雨量が1000～1500mmを超えると、イモの文化になる。ヤムイモ、マニオック、バナナがその主たる作物となるが、ヤムイモはヤム・ベルトと呼ばれる非常に狭い限られた所にしかない。マニオックは広い地域に広がっているが、元来新大陸起源の作物でアフリカには最近入ったものである。トウモロコシもやはり新大陸起源で、カメルーンで調べた限りでは18世紀末頃に入ってきたものでしかない。

私が調査したカメルーンで、もう少し詳しく、降水量と穀物農業、根菜農業の関係を見てみよう。南北に細長い北カメルーンにはアダマワ県、ベヌエ県、ディアマレ県という県が南北に連なっている。アダマワ県では年雨量が約1500mm、ベヌエ県では約1000mm、ディアマレ県では約800mm～600mmになっており、三県とも面積も作物の生産量もほぼだが、その生産量の割合は、大きく異なっている。ディアマレ県では穀類が71%、イモ類がわずか5%しかない。ところがベヌエ県に入るとイモ類が34%、穀類が36%で拮抗してくる。そして、一番南のアダマワ県ではイモ類が73%で穀類が23%と逆転する。しかもこの穀類には新大陸起源のトウモロコシが多く含まれており、イモ類もほとんどマニオックである。これらの新大陸起源の作物が来る以前は何を耕作にし、何を食べていたのか考えさせられる。いずれにしろ年雨量1000mmのところで穀物農業は限界にくる。穀類、特にソルガムは多くのタンパク質を含んでいるのだが、イモ類はタンパク質の含有量が非常に少ない。しかもイモ類が広がる所は、同時に家畜もなくなるところだ。雨量1000mmあたりから南はタンパク質の栄養分が少なくなる地域となる。この地域になると、昆虫食やサル食がおこなわれるようになるが、それもタンパク資源の不足から説明が

つく。しかし、雨量1000mm以下の半乾燥地では、昆虫食、サル食は見られない。、基本的な食料生産の面からみれば、年雨量1000mm以下のサバンナ・ステップ地帯は非常に豊かな所であると言える。

さらにサバンナ・ステップ地域には川がある。西アフリカではニジェール川やセネガル川という大きな川が砂漠すれすれの所を流れており、チャド湖もサハラに接した南縁部にある。これはアフリカ大陸が中央部でへこんだ逆順状形をしているからだ。ニジェール川では自然灌漑によるアフリカ稲(オリザグラベリマ)の稲作が非常に発達している。さらにここにはフルベ族という牧畜民もあり、乾期には川の周りに集まり、雨期には川から離れていくという季節移動が繰り返されている。乾期にはウシが川へ水を飲みに来るが、その周辺に大量のウシの糞が落とされる。川が増水すれば、この糞が魚の餌となるから、ニジェール川やチャド湖は魚も非常に豊かな地域になっている。サハラ南縁の乾燥地帯には、基本的な第一次生産である、牧畜、穀物農業、灌漑農業、さらに漁業が揃っているのである。同時に野生動物も非常に豊富な場所で、カバ、アンテロープ等も見かけることができる。開発が進んでしまったために、現在野生動物は減少してしまったが、西アフリカの内陸の半乾燥地帯は狩猟生産がもともと豊かな場所で、マリ王国などの建国の伝承には、狩猟のチームが次第に軍事の組織として発展していった様子がうかがえる。

さらに、西アフリカの乾燥地帯ではサハラ交易が8世紀頃から始まっている。ラクダは元々はサハラにいなかったが、4世紀頃からサハラでも一般化してくる。ラクダを使ったサハラ交易は、イスラームが8世紀に北アフリカに広がると同時に発展しはじめた。特に西アフリカ西部地域には金の産地があり、これを求めて大勢のアラブや地中海の商人が入ってきた。もう一つ重要なのは、サハラ砂漠の中央に岩塩産地があることだ。その塩が金の産地のあるサバンナ地帯にまで運ばれ、人々の生活を潤した。金と塩はほとんど同じ重さで交換されるほど重要な交易品だった。こうしたサハラ交易の刺激を受けて、サハラの南に数々のイスラーム王国が出現した。有名なマリ帝国もそうだ。チャド湖周辺にもカネム・ボルヌという王国ができた。サハラの南の地域はイスラームと結びついて発達したサハラ交易網ルートの辺縁部の文化、あるいは社会として理解していいだろう。こうした西アフリカの内陸半乾燥地帯に比べ、海岸地帯は、ヨーロッパ人が来るまでは全く外的交流のない孤立した地域だった。

2. 西アフリカの東西構造

西アフリカの地域構造を細かく見ると、東部と西部のちがいが非常に強く感じる。西部の西

スーダンと東部の中央スーダンで、そのちがいを比較してみよう。まず第一次生産の灌漑農業を稲で見ると、西部のセネガル川・ニジェール川流域では遥か昔から稲作が始まっている。ところがチャド湖のある中央スーダンは稲の栽培に適した所だったが、ここで稲の栽培が始まったのは19世紀になってからだ。それも元々西部にいたフルベ族が持ってきたと言われている。フルベ族はセブウシという大型のウシも中央スーダンにもたらした。第一次生産の基本的な面は西部の方が歴史が深い。

サハラ交易との関係から見ると、西スーダンではセネガル川とニジェール川が水上運搬の通路として使われていた。ニジェール川湾曲部にはジェンネ、トンブクトゥという有名なサハラ交易の町もできた。トンブクトゥとジェンネは水運で結びついており、ニジェール水運を利用した交易は、サハラのラクダによる交易とも結びついていた。ところが、中央スーダンでは水上運輸はほとんど行われていない。さらに中央スーダンのサハラには山があり、ここにはトゥワレグ族やツプと呼ばれる牧畜民が住んでいた。彼らはサハラの原住民で、イスラーム化がいまでもそれほど進んでいない。交易を担ったアラブ系の人々は、彼らの分布地を避けるようにして交易路を広げて行った。彼らの分布地を通ると、トゥワレグ族の首長に多くの税金を払わされるからだ。いつ襲撃されるかわからないという恐怖心もあった。それだからサハラでも山岳地の遊牧民の多い地域は、交易のルートとしては発展しなかった。これに対して、無人の砂丘砂漠が広がるサハラ西部は、ラクダによる交易に非常に適した砂漠だと言えるだろう。さらにその北部の北アフリカにはモロッコがあり、昔から多くの古い王国があり、山があり、したがって、緑があり、川が流れ、たいへん豊かなところだ。ところが北アフリカは西から東へ行くといまのリビアに出る。ここは海岸地帯まで砂漠が迫っていて農業生産も低く、立派な王朝も存在しなかった。サハラ北側の西部地域には、サハラ交易を推進させるしっかりとしたカウンターパートがいたということだ。いまもモロッコのアトラス山脈の南には、実に美しい交易都市が連なっている。こうしたサハラの北側と南側の条件のちがいで、同じ西アフリカでも、東部と西部ではサハラ交易の発展に大きな差があったと考えている。

15世紀以降の近代になると、ポルトガル人やオランダ人等のヨーロッパ人が大西洋岸沿いにアフリカへとやってきた。この点でも、サハラ西部地域は海岸に近くヨーロッパ交易とも関係が深くなる。16世紀の終わりにモロッコがサハラを横断してトンブクトゥに攻め入り、ソングイ帝国を破壊しているが、おそらくそれは、西アフリカ西部に産出する金を大西洋からやって来たヨーロッパに奪われてしまうのを危惧し、直接西アフリカを占領して金の交易を握ろうとしたのだろう。いずれにしろ、15世紀以後、西アフリカもヨーロッパとの関係が深くなってく

る。

19世紀中頃から、ヨーロッパによるアフリカの植民地化は内陸部へと進む。その際の進入路となったのが、内陸まで船行可能な河川で、特にセネガル川は内陸奥深くまで船を進めることができるため、フランスの植民地侵略の本拠地になった。そのために西アフリカ西部植民地化を進めるフランスと、アフリカ軍との間で凄惨な戦争が繰り返された。ヨーロッパの植民地侵略に立ち向かった人として有名なのが、エルハジ・ウマルやサモリ・トゥレである。いずれも壊滅してしまったが、ヨーロッパとの交易で鉄砲を手に入れていたことも、かれらがヨーロッパ軍に対して凄惨な戦いを挑んだ理由の一つだった。それだけこの地域は、ヨーロッパの大西洋との関係が深い。

ところが中央スーダンには、ヨーロッパの大西洋交易とも関係が少なかった。これは中央スーダンと大西洋岸との間にはアダマワ高原、ジョス高原という山岳地帯があり、地形的に中央スーダンは、海岸地方から入り込むことが困難な地域であったからだ。1900年頃にはアフリカ植民地化の最後の仕上げとして、中央スーダンも植民地化された。しかし、抵抗はほとんどなかった。ソコト帝国には鉄砲がほとんど入っておらず、ヨーロッパが鉄砲や大砲を鳴らしただけで、ソコト帝国政府もその下位国家政府もさっさと降伏してしまったというのが実情だ。もちろんヨーロッパ側に死者も出てはいるが、ごく少数だったために王国自体はヨーロッパ人の復讐の対象にならず、最終的には温存され、植民地統治に利用され、現在でもカメルーンやナイジェリアに残っている。

したがって、西アフリカの地域性ということで指摘しておきたいことの一つは、中央スーダンは西アフリカの中でも大変自律的な発展を遂げた地域だということだ。これに対して西アフリカ西部の西スーダン地域はサハラ交易、さらにヨーロッパの植民地化、それ以後の大西洋交易などの影響を非常に強く受けて、対外的な関係の変化による歴史的変動が激しかった。それだけこの地域の人間はある意味では屈折していると同時に非常に洗練されている。中央スーダン人は、どちらかと言えば、素朴である。

3. 「フルベ族の聖戦」というイスラーム教徒と改革運動の存在

先程の議論でイスラーム化の問題が出ていたが、西アフリカと東アフリカの大きな違いとして、西アフリカには多数イスラーム帝国が成立したことだけではなく、「フルベ族の聖戦」というイスラーム宗教改革運動が存在したことの意義を強調しておく必要がある。マリ帝国、ソンガイ帝国の国家の成り立ちを見ると、名目的にはイスラーム化しても、イスラーム化の程度

は非常に皮相的であった。王宮の中の女性が裸であったり、王都でも王の住む場所とイスラーム商人の住む場所は分けられている。王の世継ぎを選ぶ時などには、アミニズム的な宗教原理が非常に強く出てくる。王権の基盤にはイスラームの原理だけではなく、アミニスティックな原理、フレーザーの言う神聖王的観念が非常に強い要素としてあり、二重性があったと見ている。

ところが、18～19世紀の西アフリカでは、牧畜民のフルベ族がイスラーム教を奉じて宗教戦争ジハードを起こす。この聖戦の相手は単にイスラーム化されていない人々だけではなく、伝統的なイスラーム王、イスラーム国家にも及んだ。ソコト帝国という中央スーダンに成立した大国家の形成にあたっては、ハウサ王に対する聖戦に始まり、ボルヌという中央スーダンでは非常に歴史の深いイスラーム王国に対しても聖戦をおこなっている。ニジェール川地域の聖戦では、ジェンネやトンブクトゥという伝統的なイスラーム都市のウラマー相手にも聖戦を起こしている。ジェンネやトンブクトゥでは、アラブベルベル系の人達が宗教的な権威を持っていた。そのアラブベルベル系の人達に対してもフルベ族は戦ったのだ。いままでのイスラーム化は間違ったイスラーム化だとし、伝統的なイスラーム国家やイスラーム権威が倒され、新たなイスラーム国家が建設された。その王都は面白いことにいままでの商業ルート交都市とは別の所に作られている。東アフリカにはこのようなイスラーム宗教改革運動はなかった。東南アジアのイスラーム化の話を知っていても、このような純化を求める宗教改革運動は見られない。東アジアのイスラームについては、宗教的混迷のはげしく、かつ怪しいイスラームという印象がある。

マリ帝国などのイスラーム化の主体は、長距離交易でサハラを越えて来た外来のアラブ系の商人達が中心であり、現地の王たちのイスラーム化は、お付き合いという要素が強い。山間や周辺の農民は、ほとんどイスラーム化されていない。ところがフルベ族の聖戦によって初めて、牧畜民というアフリカの第一次生産者がイスラームの主体となった。それ以来、カメルーンのように、元々サハラ交易がほとんど入っていない所にもイスラームの国家ができた。

フルベ族のイスラーム国家建設は、地政学的に言えば、乾燥サバンナから湿潤サバンナへの権力のシフトであった。いままでは長距離交易に関係するようなサハラに近い乾燥地帯に都市があった。政治権力も何らかの形で長距離交易に関係する地域に権力の拠点としての王都を置いたが、フルベ族の聖戦とともに、長距離交易の中心地点であるサハラ砂漠から離れた所にもイスラームの権力ができた。この背景には、家畜、布という西アフリカの大地に根ざした第一次生産、第二次生産が経済価値を獲得したという、この地域の商工経済の成熟という背景があ

と考えている。サハラ砂漠の交易というと、金や塩、象牙やダチョウの羽、毛皮というような狩猟の対象物のみが問題になりがちだが、フルベ族の聖戦が起きた18～19世紀には、注目すべきことが二つあった。一つはイスラーム衣服文化の発展である。と言うのは、元々は裸だった人達がイスラーム化すると、イスラームの服を着る。服を着るか着ないかで、イスラーム教徒かどうかは区別されたからだ。しかも、衣服というのは一般に高価で、見事な染色や刺繍が施された衣服は特に高価だった。いまその当時の服を買おうとしても、5、6万円、場合によっては10万円もの値段がついている。布や服は、当時は奴隷1～2人と交換されていたようだ。また、サハラ交易の進展によって成長した都市がかなりの消費人口をかかえるようになると、フルベ族の持つウシも非常に大きな経済価値を獲得した。ウシの値段も一頭で奴隷1人ぐらいの価値があり、ウシは衣服などの高価な工芸品とも交換することができた。それ故に、フルベ族は西アフリカにも広がりつつあった商品経済発展の鍵をにぎる存在となり、イスラーム化やイスラーム国家形成という社会形成の原動力になったと考えられる。重要なことは、サハラ砂漠南縁地帯の歴史発展には、サハラ長距離交易の直接的影響によっておきた商品経済の発展・国家形成と、この二次的影響下におきたサハラから離れたより湿潤なサバンナ地域での商品経済・国家形成の運動があったということである。それはサハラ交易のような重商主義的経済よりはアフリカ大陸内部の着的経済の成熟に基礎をおいている。

4. 裏がえされた歴史－西アフリカ植民地化の構造的理解のために－

西アフリカ内陸世界の文化や経済は、サハラを越えてやって来た外来文明の影響を受けて発達した。だが、ヨーロッパ植民地主義は海岸からやって来た。アフリカから見る限り、西洋の植民地主義の拡大の基礎には、黒船に象徴される「海の論理」があり、実質的には海洋交通の支配がポイントとなった。植民地主義は海岸から内陸へと進み、とくに川を拠点に内陸へと侵入していった。例えばフランスのアフリカ大陸侵入の本拠地になったのはセネガル川、コンゴ川であり、イギリス植民地主義の基礎はガンビア川、ニジェール川、ベヌエ川であった。これを象徴するのが、1884年のベルリン会議である。これは、列強によるアフリカ分割のルールを決めた会議で、その中にドイツ・ドクトリンというものがある。条約に明記はされていないが、海岸部を占拠した国は、その後背地に対する優先的植民地権を認めるというものだ。実際の植民地化以前に、列強同士お互いに争わないようにアフリカ分割が決められた。それ故、アフリカ諸国の国境は大半が海岸から内陸に垂直に延びている。また、セネガル川やニジェール・ベヌエ川などは国際河川に指定された。

このようなアフリカの歴史から、なぜアフリカのサーヘル地帯がいま貧しく、東南アジアが豊かなのかという一つの解答が出てくる。ヨーロッパは海岸を本拠地にして都市を建設し、鉄道を敷き、物流の流れは大西洋やインド洋などの大洋が中心になってしまった。場合によっては、サハラ砂漠ルートのような内陸交易ルートを破壊していく。かつてはサハラ砂漠はインド洋と同じようにムスリム商人が大活躍した物流の大動脈であった。サハラは海にたとえられ、サハラ砂漠南縁のサーヘルはその陸の海に面した沿岸という意味である。ところが、ヨーロッパのアフリカ植民地化によってサーヘルは文字通り内陸化され、そのために後進化してしまった。サーヘル地帯は本来持っていた交易機能を全て奪われ、さらに植民地化後はサハラ砂漠にいくつもの国境線が張り巡らされた。植民地時代は、北アフリカのアルジェリア、モロッコとその南のスーダン地域はともにフランスの植民地で行き来はあったが、各国の独立後はお互いが国境線の敷居を高くし、さらに領土問題がおきた。まずチャドとリビアの紛争が起きた。リビアのカダフィがチャドに攻めいって、中央スーダンのサハラ横断ルートは分断された。次にモロッコとアルジェリアの国境問題が生じた。歴史的にはモロッコの勢力はアルジェリアのサハラ砂漠の大半を覆っていた。いまでもサハラ砂漠には多くのモロッコの要塞が残っている。ところがフランスがアルジェリアを植民地化して仏領アルジェリアの領域を著しく拡大した。独立の時には、アルジェリアの領土の一部をモロッコに返す約束があったようだが、実際にはアルジェリアが占有してしまった。そのために、モロッコとアルジェリアは戦争状態に陥った。かつて盛んであったトンブクトゥなどのサーヘル交易都市とモロッコとの交易は全て潰れてしまった。さらに最近ではアルジェリアとニジェールの間でトゥワレグ族が反乱を起こり、いまはサハラ中央部の国境が閉鎖されている。現在サハラに張り巡らされている国境はほとんど閉鎖されていると言っている。そのためサヘルの都市のほとんどが商業機能を失ってしまい、衰退の一方にある。これに砂漠化という自然環境の変化が加わってサヘル地域の貧困はどこもすさまじいが、連綿と続いていた乾燥地の内陸交通網が破壊されてしまったことが、現在のサヘル地帯の貧困化をもたらしている最大の原因である。

ヨーロッパが海岸地帯からアフリカを占拠していったことは、海岸地帯の国にとっても必ずしもプラスではなかった。その典型的な例がカメルーンだろう。カメルーンの北にはレイ・ブーバなどの伝統王国が伝統的スタイルを保持したまま残っているが、それは、カメルーンが無理な国づくりをしたが故に、このような伝統王国が残ってきたのだ。19世紀の末に、イギリスはニジェール川沿いに植民地化を進め、フランスはコンゴ川沿いに植民地化を進めた。この真ん中をイギリスとフランスのどちらがとるかという時に、ドイツのビスマルクがベルリン会

議を召集して、漁夫の利を得た。ベルリン会議が締結される1～2週間前に、ナヒチゲルというドイツの有名な探検家がカメルーンの海岸部に来て、ドアラ族の首長と保護条約を結んでしまった。そのためにその後背地は実際の植民地化が始まる前にドイツ領とされた。そして、まず全くの机上の論議でイギリス領ナイジェリアとドイツ領カメルーンの国境が決められた。イギリスがこの条約締結に同意したのは以下の理由による。チャド湖近辺から物資を海岸へ運び出すには、ベヌエ川しか交通路がなかった。したがってチャド盆地とベヌエ川の間をドイツが占領すれば、フランスはチャド盆地の物資を外に運び出せなくなってしまう。それ故、イギリスは喜んでベヌエ川上流部をドイツに与えた。そこで、フランスは仕方なくドイツとの間で国境画定の協議に入った。フランスもできるだけベヌエ川に近いところまで領土を広げたかった。このようにカメルーンという国の形は、その結果、北カメルーンの領土は、北部のベヌエ川のところが細くくびれた形になっている。こうしたカメルーンの不可思議な国境は、植民地化される以前に列強が全くの机上の議論で植民地分割を行った結果である。

ドイツのカメルーン植民地化は1894年に決まっていたが、カメルーン全土が実際に植民地化されるのは1900年になってからのことだった。しかも机上の議論であった故に、植民地経営には様々な困難が現れた。ドイツは海岸の町のドゥアラを占拠したが、ドゥアラと北カメルーンの間には標高1000mものアダマワ高原がある。これを越えて、南北の交通路を建設するということが大仕事だった。アダマワ高原の中心都市ガウンデレに鉄道が通じたのは1974年になってからだ。ドイツはカメルーンという国を作ったが、北カメルーンについては植民地経営らしいことは何もしていない。開発しようにもできなかったのだ。そのために、実際の統治は王国の王に任せていた。その結果、ここにたくさんの王国が残ることになった。このような無理な国づくりによって生じた矛盾は、カメルーンだけでなく、西アフリカの内陸社会の全てが持っている。特に内陸に孤立させられたチャドは一番の悲劇的な国だろう。独立以後、国としての体裁をなしていない。

さらに言語の問題もある。フランス領であったマリは、フランス語を強要されてきた。いま自分達民族の言葉を使おうという動きができていますが、マリの人達は自分達民族言語(ラング・ナショナル)はラング・インターナショナルだと言う。マリの部族はほとんどが国境からはみ出して広がっており、部族語は、したがって国境を越えて活かされるインターナショナル・ラングエウジというわけだ。

5. 西アフリカから見た「近代世界システム」論

今回は東南アジア研究者との研究発表会でもあり、このような西アフリカ地域論の観点から東南アジアをどう考えるか、また何かと話題となるウォーラステインの近代システム論をどのように考えるかという話をしておきたい。

ウォーラステインは、孤立していた各地域が、ヨーロッパの海外進出によって初めて国際的に開けた世界になったと言う。近代世界システム以前には、同じような国際システムは存在しなかったとしている。だが私は、ヨーロッパが近代世界システムを作る以前にも、そのような国際的システムは存在していたと考えている。家島彦一さんはヨーロッパ人到着以前のインド洋における海洋交易の発展の重大さを指摘されているが、イスラム時代の旧大陸世界には、こうした海域世界と内陸の乾燥地帯をつなぐ全世界的な交通網が広範に発達していた。内陸の乾燥地帯は、ラクダとウマによって動く世界である。自動車等の近代的な交通網が発達する以前は、船かラクダかウマが交通を担っていた。そうした伝統的な交通手段がアフロ・ユーラシア大陸内部の半乾燥地帯には存在していた。モンゴル史の専門家の杉山正明氏の「フビライの挑戦」という本でも、モンゴルがユーラシア中央部を占領した背景には広大な交易網が存在し、モンゴルはさらに東・南シナ海の海域世界の交易も支配しようとしたということが、まさに同じ観点から書かれている。

旧大陸の内陸交通網体系はユーラシアのエコロジーに対応して説明できるだろう。アフロ・ユーラシア大陸において、年間降雨量が約500mmの地域がどこに広がっているか図で示してみた。ラクダによる交易の可能な地域は、アフリカでは年間降雨量500mmまでで、それ以上になるとラクダを使うことはできない。もっと冷涼な地域では、この限界線がどうなっているか私は詳しくないが、およそ500mm内外がやはりラクダの活動の限界線ではないかと想像している。そこで500mmというラインをひいてみた。その内部が伝統的的交通網が発達した地域だと考えられる。日本や東南アジア、ヨーロッパは、こうした旧大陸の中央部に広がる内陸交通体系の辺境地帯ではないか。日本も内陸ユーラシアの交通網の恩恵を被っているのは言うまでもない。インドから内陸を伝わった仏教文化が7世紀、聖徳太子の時代に日本で花開いている。それ以前にも、騎馬民族国家説があるように、内陸ユーラシア文化の影響を受けている。古墳から多くの馬具が出土しているのは、内陸ユーラシアとの深い関係をしめすものだ。このように「近代世界システム」以前にも、世界諸地域を覆う経済圏や文化圏、交流圏は既に存在していた。文字の研究からも同じことが窺える。モンゴル文字はアルファベット系の文字で、ウイグル文字などと関係がある。満州文字もアルファベット系の文字である。さらにアルファベット系の

文字の起源を探れば、地中海をかつて支配したフェニキア商人のフェニキア文字にさかのぼる。このようなことから、一つの共通文化圏が考えられるのではないか。

ウォーラステインの議論で問題になるのは、世界帝国の捉え方である。ウォーラステイン自身、民族や地域が孤立して存在したのは誤りであると批判していながら、世界帝国は孤立した単位だと考えている。彼は中国の例を出して「中国は閉じた」としているが、上に述べた例をとってみても、閉じているとは考えられない。ウォーラステイン批判をもう少し整理すると、まず次のように言える。どのような社会にも、文化の秩序、政治の秩序、文明の秩序、情報の秩序というように様々な次元が考えられる。それが全て同じように一致することはない。経済の秩序は、政治の秩序よりも広がるだろう。情報の秩序はもっとはるかに広がっていく。仏教が日本に来たことを考えれば、情報の秩序はインドから日本まで一つの世界と考えてもいい。言い換えれば、輪郭が明確にあるような世界は考えられないということだ。世界帝国でも明確な輪郭があるわけではなく、ある面では例えば、政治次元では明確な輪郭があっても、別の次元では境界が滲み出すようにして広がっているのが実情だ。このようなはっきりした輪郭を持った世界という幻想維持には文化人類学にも責任の一端がある。文化人類学は民族や文化を孤立した単位として考えがちだからだ。ギアツがインドネシアという非常に多様性を持った世界を、一つの世界のごとく捉えていることから窺えるだろう。これは、アメリカ流、ヨーロッパ流の文化人類学の大きな欠陥だ。

近代世界システムは海洋交通の発展に依存している。これはウォーラステインも認めていることだ。しかし、アフリカから見る限りより、歴史の古い内陸交通網体系も19世紀末頃まで存在した。あるいは20世紀中頃まで存在したといってもいい。ウォーラステインの議論の問題は、ウォーラステインがそれまでは孤立した世界を近代世界が「結び付けた」と近代世界システムのプラス面のみを強調していることだ。しかし、近代世界以前にかなりグローバルな交流圏が存在し、そして、より重要なことは、近代世界システムは近代世界システムに匹敵する広さを持った内陸交通網体系を破壊した面があるということだ。孤立的な世界システムを結び付け、より広い近代世界システムに統合したというのは、完全に西洋植民地主義正当化のイデオロギーでしかない。例えば、北カメルーンは、伝統的には、現在ではナイジェリアに本拠のあるソコト帝国やハウサ地方と深い関係を持っていた。だが、植民地化によって、中央スーダンとは分断され、カメルーンという人工国家がでっちあげられた。ドイツ政府はしかも国境を超える商人の交流を禁止している。そして、伝統的なムスリム商人を南カメルーンに結び付けようと努力するが、アダマワ高原を下るのは非常に困難なことだった。植民地経済、植民地化

による近代世界システムは、このように、伝来の地域間交流を破壊し歪め、他方できわめて強引に新たなグローバルな世界システムをつくろうとしたためにむしろ新たな矛盾を引き起こしてきたのではないか。

さらにもう一つ重要なのは、近代世界システムが開放システムではないことだ。近代世界システムは、植民地ブロックを作ってしまった。カメルーンはドイツ領、隣のナイジェリアはイギリス領という形で、アフリカ諸地域間の交流がむしろ妨げられてしまう。角山氏が言われたことだが、自由主義経済という名の下に、帝国主義的な征服が行われている。近代世界システムによって、自由貿易、自由主義経済が広がったというのは、幻想で、自由貿易という名の帝国主義(Imperialism of free trade)が広がったのだ。

以上のような観点からで、東南アジアを考えてみると、東南アジアが発展したのは、植民地化以前の伝統的な交易と矛盾しない形で、海洋の近代システムが発展したことが大きい。また、敗戦による日本の東南アジアへの帝国主義的進出の失敗によって、東南アジアのいくつかの国がいち早く帝国主義的近代システムから脱却しえたということも重要だ。しかし、アフリカは大半がまだかなり強烈なネオ・コロニアリズムの体制下にある。

高谷さんがタンザニアのスワヒリ化が、タンザニアの国家政策と関係しているというコメントをされたが、これは非常に重要なことだ。タンザニアの就学率は約80%もあり、非常に成功している。ところがマリでは7~8%にとどまる。タンザニアで就学率が成功しているのは、スワヒリという現地の言葉を学校教育に導入したからだろう。ほとんどのフランス語圏では小学校教育からフランス語が強要される。その上に、教科書もない。アフリカはいまだに帝国主義的な近代世界システムの中にあるのだ。そんな地域では、就学率や識字率の向上は不可能だ。一方東南アジアでは、日本の侵略でフランスやイギリスの植民地主義が一度途切れている。再度イギリスやフランスが来ても、以前通りの植民地政策はできなかったのではないか。もちろんこれがこじれると、ヴェトナムやカンボジア、ビルマのようになるが、いずれにせよ、東南アジアで驚くべきことは、ほとんどの国で自国の民族語で教育が行われていることだ。これは、国民の教育レベル向上の第一条件だと思う。

6. 近代に同時進行したフロンティア開発

最後に、何ゆえに西ヨーロッパが特に限界がありながら、広範な地域をカバーする「近代世界システム」形成にイニシアティブを取りえたかということを考えておきたい。ヨーロッパでは地中海の交易が昔から盛んであった。そこで培った航海術や経済の蓄積はヨーロッパ近代シ

ステム形成の要因として当然考慮しておくべきだろう。しかし、もっと視野の大きな地球規模の文明論で説明してみたい問題がある。ユーラシアにある500mm以上の年間降雨量の地域分布図を見ると、これらの地域に東南アジア、アフリカのザイール周辺の熱帯雨林、日本、そしてヨーロッパが入る。どれもが旧大陸の辺縁部にある。これを見て考えると、文明は乾燥地帯から森林地帯へと進むイメージが得られる。アフリカでも文明発展は、サハラ辺縁部などの乾燥地から、森や林の開墾につれて、湿潤森林地帯へと進むというイメージが強い。次に年降雨量ラインを1000mmでとってみると、面白いことが起こる。東南アジアやアフリカには森があるが、ヨーロッパにはなくなってしまふ。日本で年降雨量1000mmと言えば、むしろ小雨地域で、瀬戸内海周辺がそんな地域だ。しかし、ヨーロッパで年雨量が1000mmあるのはアルプスとイギリスの一部、フランスのブルターニュぐらいしかない。言い換えると、ヨーロッパの森は、東南アジアやザイールの森に比べたら深くない。おそらくヨーロッパの森はそれ故、3地域の中では一番最初に開発し尽くされてしまったということが考えられる。

実際、ヨーロッパでは12、13世紀、その後にもう一度16、17世紀に大開墾時代がある。この時代にはヨーロッパに開拓すべき土地が無くなってしまふ。実はウォーラーステイン自身がそれを認めることを書いている。「伝統的な交易は奢侈品の交易であり、日常生活品の交易ではなかった。ところがヨーロッパが必要としていたのは、穀物であり、木材である。」木材を必要としていたのは、まさにヨーロッパの森が消滅したことを表すものに他ならない。イギリスはこの木材を北欧から輸入するほどだった。ヨーロッパの畑作は牧畜との複合生産で、非常に広い土地を必要としたが故に、たちまち土地は不足してくることも重要だ。それ故、ヨーロッパは新たに土地を求めざるをえなかったことが推測される。それが南米や北米大陸である。これをウォーラーステインはフリートレードや資本主義に特徴づけられる近代世界システムの発展を見ようとするのであるが、わたしは、むしろ帝国主義的な土地を獲得するための入植運動だと考えたい。

同じ理由で、他の大文明がなぜ外へ出なかったのか、説明可能である。中国には揚子江の南に、インドには、ガンジス川からビルマにかけての地域に、広大なフロンティアとしての森が近隣に存在していた。したがってヨーロッパのアメリカへの植民、中国の華中華南の開発、あるいはインドのムガル帝国の湿潤なガンジス川流域への発展など、これは本質としては同じことのように思える。つまりそれぞれの文明圏にとってのフロンティアの拡大だ。さらに言えば、ヨーロッパが海外侵出していく時期に、日本は江戸幕府が成立し鎖国をしている。この鎖国を可能ならしめた経済的背景には、東北地方の開発というフロンティア開発の可能性があっ

たと考えている。日本の国内にフロンティアがあったのだ。最上川や利根川という大河流域の開発は、江戸時代が中心であった。このように考えてくると、日本の鎖国もヨーロッパ人のアメリカ大陸への入植も、フロンティア開発という意味で同じ運動としてとらえることができるように思う。実際アメリカも鎖国こそはしなかったが、江戸時代におけるアメリカは内向的な鎖国状態にあったと考えてもいいだろう。アメリカの独立は、ある意味で鎖国政策に比較する。そしてさらにアメリカはモンロー主義によって孤立化の政策をとっていく。このあたり、発想の大転換が必要だ。

ヨーロッパが世界へと進出していった時代はウォーラステインの言うトレードよりも、むしろ帝国主義政策によって土地を占領したり入植したりする時代であった。ロシアもシベリアの開発をしている。それは、アフリカではフルベ族の聖戦が行われた時代だ。この時代、西アフリカの国家や都市形成が、サハラ南縁に接したサーヘル地帯からより南の湿潤なサヴァンナ地帯、疎林地帯に広く広がっていった。いわば、西アフリカ内のフロンティアの開発が進んだのだ。これらは本質的には同じ運動ではなかっただろうか。日本の鎖国政策も外見は帝国主義運動と逆の政策のように見えるが、国内におけるフロンティアの存在を前提とした政策であることを考えると、内的な帝国主義的運動とみてもよいように思う。

ここで重要なことは、ウォーラステインの言う「近代世界システム」は決して開放的な自由主義経済によって特徴づけられるようなシステムではなかったということだ。もし真の自由主義経済が存在するのであれば、それは戦後の日本やシンガポール、香港、台湾を中心に形成された経済こそがそうなのかもしれない。人類の歴史で初めて政治が最小限度しか関与しない形で行われた自由主義経済だろう。それまでは自由主義と言われながらも、それは常に植民地主義と結びついていたが故に、常に政治的な操作が行われ、政治的、軍事的圧力が行使されてきた。政治や軍事と結びついた経済は、真の自由主義とは言えないのではないか。しかし最近では、その日本経済もむしろ政治的な操作によって自由を脅かされている。さらに問題なのは環境問題を考えれば、既に地球のフロンティアは消化され尽くしているということだ。これ以上開発が進めば大変なことになるだろうというのが私の実感だ。

以上、議論は広がりすぎたかもしれないが、西アフリカの地域形成とそれが現在抱えてる深刻な問題を考える中で、世界システムの問題にも思いをよせてきたことの一論を述べさせてもらった。

コメント

古 川 久 雄

嶋田さんの「牧畜イスラーム国家の人類学」を読ませて頂いた。極めて克明なる調査をされ、さらに近代世界システムを切るところまで議論は展開し、興味深く拝読した。私のコメントは、交易を中心とした内陸文明圏の話を生態的な見地から話して見ようと思う。

乾燥地帯は大興安嶺の南からユーラシア大陸の中央を通り、アラビア半島、アフリカのサハラまでつながっている。ステップは穀物栽培の世界だが、熱帯多雨林では根菜の世界になる。500mmを越える雨量があれば天水による栽培が可能だが、300mmを切る所ではオアシス農耕になるだろう。東南アジアから西の乾燥地帯は、草原であると同時に、極めて動物の豊富な地域という印象が強い。そこでは動物と競闘するような形の中で、家畜化が起こってきたように思う。一方、東南アジアにおいては、その構図は林との競闘になるだろう。自ずから違った生業形態になってくる。

動物との競闘が広大なサバンナで展開する世界が西の乾燥地帯であり、そこに穀物栽培が起こってくる。その中心はやはりメソポタミアからレバント、アナトリア高原という地域だろう。細々とした天水による畑作は、相当古い時代に遡ることができるだろうが、オアシスに極めて強力な力を持った穀物栽培が成立したのは、B C 8000年頃と考えていい。穀物栽培の色々な技術のセットが、その頃には既に成立したと考えられる。例えば麦がメソポタミアを中心に作られ、乾燥地帯を通して東西へ相当古い時期に広がっている。オアシス農耕の西の地域、アフリカではソルガムやシコクビエのような雑穀が栽培化された。ただ、アフリカでは農業起源の考古学的な資料は極めて少なく、いまのところ遡るのは紀元前2000年頃までらしい。私の印象としては、オアシス農耕が東西にスプレッドする紀元前8000年には、その刺激によってアフリカの雑穀栽培も始まったと考えていいと思う。東の方へも乾燥地帯を通して、穀作思想がインド、中国に入ってくる。中国では米が栽培化される現象が起こった。

オアシスの中心にオアシス農耕が成立したが、例えば鋤を極めて早い段階で持つ。その用途は溝掘りで、溝は家畜の水飲み場を作り、そして、貯流式の灌漑用である。灌漑には高い山の谷川から水を回す河川灌漑や、カナートもある。その畑の一筆は極めて小さく、その姿はいまでも西アジアで見ることができる。日本や中国の遺跡でも、極めて小さな水田が発掘されている。農耕に伴う色々な収穫の道具、あるいは食物調製の道具、倉などがワンセットとして、新

石器農耕革命の段階という極めて古い時代に成立する。その刺激が東西への穀作の拡大につながったのだろう。

もっと素朴な、現地の状況に応じた天水を利用するような灌漑方式もある。例えばタール砂漠のジョドプールの西には、半砂漠に大きなバンドを作って、地表水を溜め込むバンドイリゲーションを行っている。これはイランの乾燥地帯やチュニジアでも見かける灌漑方式で、わずかに窪んだ土地にトラフを区切るような形で大きなバンドを作り、麦、ブドウ、オリーブ等を栽培している。サハラ真ん中にハガルやティベスティという山があり、その下ではカナート方式による灌漑があるようだ。そこで谷水を引き込んだり、井戸を掘ってナツメヤシを栽培することは昔からあったと思われる。嶋田さんが言われた、ユーラシアを貫き東西に広がる乾燥地帯では、かなり古い時代から穀作農業が広がった。アフリカではハム・セムの人々が交易品として作物を運び、それ以外に金や岩塩を運ぶ形で、ハム・セムのスプレディングも相当古い時代に起こっていたのだろう。「サヘル」という言葉を考えてみると、これは「ハム・セム世界の端」という意味を意識しているのではないかという印象を受ける。

東南アジアとの比較で考えると、東南アジアから西の乾燥地帯は、動物との競闘、家畜化ということ以外に、作物生産においても極めてモノカルチャーだという印象を極めて強く受ける。広い地域にわたって同じものを植えている。林との競闘を経てきている東南アジアにはないことのように思う。オアシスに城郭都市を巡らして権力を集め、産物の記録のために字を発達させる。そこで起こる土地争いや部族同志の対立を裁く裁判や、そこから生まれてくる社会制度など、様々なものを含み込んだ都市がそこに成立する。その城壁都市の中心にいる王が、農産物を戦略的物資と考えてモノカルチャーを進める。このような伝統が、西アジアからサハルの地帯に古くからあると考えられる。

港を見ても、西の方では王の権力と結びついている。王宮に住む人々が遠い外の世界の財を受け取る交易のための港としての性格が極めて強い。他方、東南アジアは世界に誇る多島海の世界だ。日本の浦にあたるような集落が多くあり、海岸は海の中を歩く人達が大勢いる。海の中にいる海老や、魚、珊瑚、ナマコなどを捕る生業があるのだ。東南アジアの場合、インドや中国、アラブから商人が来て港を作るが、交易的な機能以外に、生活の場としての海岸があったことを考えねばならない。

東南アジアは乾燥帯から穀物栽培を受けとるが、その間にはインドや中国という、定着的な空間を作る伝統や、富を集めて文明を作っていく伝統を持った巨大文明がを介在している。ところがアフリカでは、乾燥帯の農牧複合が巨大なサハラ砂漠を通過する段階で、文明の単純化

が生じ、生活文化が先祖返りしてしまう。中尾佐助氏は、アフリカの遊牧民をモンゴルの遊牧民と比較すると、アフリカの遊牧民は実に貧しいと書いている。確かにモンゴルの遊牧民の生活は立派な家を持ち、家畜の利用、製品の利用に極めて発達したシステムを作り上げている。そういう文明圏を経ていることが、アフリカの牧畜の弱発達という要因ではないか。

西の方の作物生産はモノカルチャーだが、それに対して東南アジアはミックス・クロッピングが特徴だ。林を焼き、非常に様々なものを植える。これはインドの伝統を受け継いでいるのかも知れない。これは意外に大きな意味を持つのではないか。例えば現在のインドネシアの工業化でも、タイの近代化でも、フルセット工業化を考える。この基盤が一次生産の中でミックス・クロッピングという形で既に形成され、現在にまでつながっている印象がある。

もう一つ奴隷制についてコメントしておきたい。アフリカの奴隷制はアメリカの奴隷制とは違い、支配者と一種の共生関係にある。これはハム・セム世界の伝統だろう。奴隷制が出てくる基盤として、ある種の長い人類進化の過程を踏まえているような気がしている。旧人と新人の交代期における旧人のすりよりが、奴隷化を生む基盤にあるのではないか。アフリカ研究の人類学の方達に考えて頂きたいと思う。それに対して東南アジアのミックス・クロッピングの農耕は、自営が基本である。プランテーションという形で、モノカルチャー及び一種の農奴的な形の編成が行われているが、これは近代に入ってからのことだ。

その他にも近代世界システムや世界単位の話が出ていたが、それは高谷さんからコメントを頂ければと思う。

質疑応答

市川 アフリカのサヘルの農業は、北アフリカのバンド灌漑、あるいはオアシス農耕が直接入ってきたと述べられたが、その点を確認しておきたい。

古川 オアシスの灌漑畑の思想も入っていると思う。島根大学の若月さんが、ナイジェリアに日本の近代的な水田を入れようと指導されている。その前提として大きな圃場を作る必要があるが、それは現地に受け入れられな

い。極めて小規模な斜面での稲作という伝統があり、若月さんの熱心な指導もなかなか浸透していかない。

高谷 サヘルとスワヒリではずいぶん違うという印象を受けたが、何がどう違うのかをもう少し聞いておきたい。嶋田さんは内陸の砂漠が海と同じだと言われた。ところが古川さんが言われたように砂漠帯は、セネガルからモンゴルまで続き、そこには、海とは違う様々な形の農業というものがある。その農業

に着目すれば、アトラス山脈にもバンド灌漑があり、ナイル、メソポタミアには河川灌漑、ペルシャは天水農業ができるというように、それぞれに特徴のあるかたまりができる。サヘルやサハラは海ではなく、農業があるところと考える。それが大きな違いだと考えていいのだろうか。

例えば、トンブクトゥはアラブ商人の町だ。しかしその横には地元民の王都がある。彼らはイスラームでもアラブでもない。若月氏が言われていたような農耕民の王かもしれない。サハラは本当に交易だけの場なのか、それとも農業基盤があり、それ自体が地域をなしているようなところなのか。

嶋田 サハラに限って言えば、重要なのはやはり交易だと思う。とくに重要なのは塩の交易である。サハラの中央でとれる塩の交易は、生活必需品としてサハラの南サーヘル・スーダン地域まで交易されている。だが、東アフリカのインド洋交易では内陸地域の人々の生活必需物品を交易していたようにはおもえない。もう一つは、ニジェール川の水運は船の輸送力が大きく、稲などの重量のある農作物が交易されている。いずれにしろ塩の交易が重要ではないかと思っている。

農学が問題になるのは、むしろ周辺だと思う。サハラを囲む南北地域に農業基盤のある世界が存在し、それらがサハラによって結びつけられる。アトラス山脈はサハラというよりは、このサハラ周辺地域に入る。トンブク

トゥもサハラというよりは南周縁部に位置している。ただし、サハラもまったく第一次生産が不可能な地ではなく、中央部の山岳地帯ではけっこう牧畜が可能で、トウアレグ族の分布地になっていて国家まではいかなかったが、それに類した社会をつくった。

高谷 交易という、いわばネットワーク的なものが強調されているが、その中心にその土地の実体としての農業があるというようなことが言えないのだろうか。ここには多くの王国も残っている。

日野 嶋田さんは乾燥地帯という世界システムを強調されたが、これは海のシルクロードと結びつく形でなければ成り立たない面がある。その中間地帯や周辺部には、農業によって食糧生産を支える部分がある。農業を生業にすれば動かない。逆説的に言えば、馬やラクダを使った海と、船を使った砂漠がある。動く部分の理解は海に近いのだ。動く部分はサンドイッチ状のセットになっている。東アフリカは海の範疇に属し、西アフリカは乾燥地帯の影響下に属す。そこに一つの全体構造が考えられるのではないか。嶋田さんの言う海を通じてのヨーロッパを否定する気はないが、その前の段階では、海の部分と乾燥の部分がセットになった地域構造が考えられるだろう。

市川 先ほどの高谷さんの質問は、サハラは無人の砂漠ではなく、その中に点在するオアシスがある。それは東南アジアの多島海の島

やその港などとは異なり、単なる中継点以上の意味を持っているのではないかというものだと思うが。

嶋田 けっこう生産力のあるオアシスがあることはたしかだ。サハラ中央の山岳地帯には放牧民のトゥアレグ族がいてけっこう自給自足的な生活も営んでいる。しかし、サハラの場合オアシスは基本的には中継点以上の意味はもちえなかったように思う。アトラス山脈は豊かな農業生産地だが、これはサハラの周辺にある。南のニジェール川流域も第一次産が豊かだか、これもサハラ周辺にある。こうした農牧業生産が豊かな地域がサハラ交易の拠点となり、そこにイスラーム国家が栄えたことはたしかだ。しかしサハラ交易の発達、農業というよりは、金のような希少価値のある鉱物の取引に頼っている。だから、西アフリカの西部と東部ではサハラ交易の発達とこれに結びついたイスラーム化の発達に随分と違いがある。カメルーンの方ではイスラーム化がほとんどすすまなかったが、マリ帝国やガーナ帝国には金産地があったため、イスラーム化の進展ははやかった。金のない中央スーダンでは西アフリカでも金のないところはアラブ商人は入っていない。スワヒリの世界と意外に近い。

日野 スワヒリでもジンバブエには金があった。キルワの商人が金の取引の独占権を握っていたが、非常に古い時代から大量の金が出ており、13世紀から14世紀に最盛期を迎えて

いる。西アフリカの金の取引と時期的には同じ頃だろう。

日野 この地域はむしろナイル川から延びているルートが大きな意味を持っていただろう。海と陸のルートの中間のようなところがあったのではないか。

高谷 嶋田さんは、スワヒリは Bantu peoples with Arabic or Persian blood ではなく、Arabic Persian peoples with Bantu blood とおっしゃった。それに比べると、サヘルは地元民 with Arabian merchants influence と考えてよいのではないか。そういう違いと考えていいのか。

東南アジアでもこのような分け方ができるだろう。クレオールと地元民という二つの要素を考えた場合に、東南アジアだと、島嶼部はクレオール的で、大陸部は地元的である。そういう見方からすると、アフリカの場合、スワヒリはクレオール的で、サヘルは地元的と考えていいのだろうか。

嶋田 サヘルでも、これは段階的に変化する。サハラに近い世界は Arabic-Berber peoples with 地元民だがサハラを離れるにつれて、この関係が逆転する。イスラーム化は初期・中期はアラブベルベル系聖職者のイニシアチブが大きい、ベルベル系聖職者のフルベ族の聖戦は、アラブの権威をむしろ否定するものだった。トリミングムのように、従来はアフリカのイスラーム化をアラブ化という形で理解する傾向がある。だが、西アフ

リカのイスラーム化にはアラブ化を否定するようなイスラーム化があった。それがフルベ族の聖戦だ。日本における親鸞や道元のように、西アフリカではウスマン・ダーン・フォディオやエルハジ・ウルといった土着の聖職者がイスラームの指導者としてあがめられている。東アフリカにはそういう人はいない。

日野 東アフリカで重要なことは、地域が非常に狭く海岸に局限された世界であったことと、約300年のポルトガル支配の時代に、「アラブ人」という意識を持っていた混血民が、「アフリカ人」になってしまったという特殊性がある。それが19世紀以後の世界化の中で、ヨーロッパ世界との接触の段階ではむしろスワヒリは内陸へと拡大した。その過程では西アフリカのような聖戦が起こることもなかった。イスラーム自体のアフリカの成熟は、西アフリカの方が強い。別の形で言えば、東アフリカではポルトガルの支配時代に、セクトのようなものが消えてしまったが、西アフリカでやはり聖者崇拜と結びついた形で、新しいセクトを生み出すバイタリティがあった。

イスラームに改宗する人口の多さ、少なさということも関わってくるだろう。東アフリカはアフリカの中でも新開地と言える。人口も非常に疎らで、しかもスワヒリを話す人達の中でイスラームに改宗した人は半分にも満たない。東アフリカのイスラームは海岸の局地的なところから線的に発展したが、西は面

的な発展だったという違いがある。

和崎春日 カメルーンのバムン王国を調査したが、エスニック原理 with イスラームという印象がある。イスラームが入る以前に王国形成があり、最終的な整備の段階でイスラームを利用する形をとっている。森林とサヘルの遷移地帯にはそういう王国が多い。嶋田さんの言われた聖戦も、王になってしまえばエスニックな原理に還る。そしてまた聖戦を起こし、またエスニックな原理に還る。むしろエスニックな原理の上に乗る形の方が理解しやすいのではないか。

日野 バムンでは、南からキリスト教も入り、王がキリスト教をとるかイスラーム教をとるかで大いに悩み、結局両方取り入れる形になるようなことがあった。そういう意味からの理解ではないか。

嶋田 ヨーロッパにおける森林という話をしたが、新大陸の作物がないときのヨーロッパ人の食生活は、信じられないほど貧しい。ジャガイモ、トウモロコシ、トマトも新大陸から来たものだ。ヨーロッパ人の飢餓感は強く、新大陸の発見でジャガイモが入って、やっと食糧が安定した感じがある。そしてこのジャガイモは、麦などの穀物の耕作しにくい湿油地帯で耕作可能ということでヨーロッパの森林の開墾に拍車をかけたように思う。西アフリカでもソルガムを作っているが、ソルガムには白モロコシと赤モロコシがある。赤モロコシは伝統的なもので、儀礼にも使わ

れているが、今さかんに耕作されている粒の大きい白モロコシは18～19世紀になって入ったものだ。しかも白モロコシは年降雨量1000mm以上の地域でもよくとれる。白モロコシの導入は湿潤サバンナの開発に大きく貢献したように思う。

日野 アフリカとヨーロッパは、新大陸の作物が入ってきて初めて潤っている。アフリカは、最初は東南アジアからの作物、そしてラテンアメリカからの作物が入ってきてやっと潤うのだが、それでも飢餓感は拭えない。全体の地域での気候のバラエティの中で、様々なものを組み合わせる農業が発達したということと言えるかもしれない。

立本 嶋田さんも古川さんも、文明史論的な大きな括り方をされている。地域間比較で、アフリカと東南アジアを比較する場合、文明の流れ、そしてその結果は、ということがおそらく明日の議論になるのだろう。その前に「黒船に象徴される海の論理」について、もう少し訊ねておきたい。砂漠を海だとすると、その時の内陸での海の論理とどう違うのか。海の論理、陸の論理はおそらく明日の議論にもつながるだろう。共通の認識を持っておきたい。

嶋田 海の論理というのはやはりインド洋や大西洋、太平洋を舞台とする文明、政治、経済発展の論理だ。ヨーロッパの近代世界の特質は、大洋を自由に動きまわる交通手段が発明され、それまで交通・運輸の媒体として利

用されたことのなかった大洋を交通・運輸の媒体としてヨーロッパが開発し、それにのって世界秩序を再編しようとした点にあると思う。陸の論理というのはラクダやウマによる交通・運輸体系だ。地中海、紅海、さらにはインド洋の海岸航海もこれに含まれる。大洋中心の交通体系というのは交通路も異なれば輸送力が圧倒的に巨大だ。したがって、陸の交通体系をりをよう駕してゆくことになる。

立本 ウォーラースタインの指摘する近代システムとそれ以前から伝統的に事実上成立していたグローバルなシステムのように、近代的な海の論理と伝統的な海の論理というのを分けて考えるということだろうか。

嶋田 「黒船に象徴される海の論理」の黒船というのは蒸気船隊だ。その船で一番大きな意味を持つのが、重い大砲をいくつものせられるということだろう。輸送力と同時に大砲を運べたことが、ポルトガルをはじめとするヨーロッパの世界進出の基礎になっている。

しかしこれを、伝統的交通体系に対する近代的交通体系の発展というふうに交通の発展の違いに還元してしまうのはまずい。そのものずばり陸を中心とするか、海を中心とするかという違いだ。「陸の論理」が近代とともに「海の論理」にとってかわられるが、そこには技術的理由とともに、政治的理由があると思う。

田中 様々な秩序の広がりや線を線で示されているが、特に生態については東南アジアとアフ

リカを比較する上でその線の持つイメージは重要である。例えば、サハラとサヘルを歴史的、地質年代的に見ると、降水量の違いでゾーンが移動している。その時、生態の秩序という言葉はどのようなレベルで使われているのか。サヘルならサヘルのある限られた地域での生態条件、例えばある王国の中の生態条件というような意味で使われるのか、あるいはもっと広い大陸横断的な、地理的な生態条件の傾斜という意味で使われるのか。

嶋田 実はこれを細い線と太い線で書いている。生態という場合乾燥地というように非常に広がりを見せる地域をとるか、あるいは一つの川の流域のようなマイクロな限られた地域をとるかで色々な区別の仕方があると思う。サハラやサヘルでも地域的多様性は相当大きい。

田中 太い線はロケーションスペシフィックな環境条件。細い線は降水量の地理的傾斜のように大きな生態条件という意味で考えておられるのがわかった。情報、経済、文明という言葉があるが、情報は文明を超えて広がるということだろうか。

嶋田 文明の定義にもよる。例えば、釈迦の教えが日本まで来るのは、やはり情報として伝わっていると考えたい。しかし仏教が広がってはる地域を一つの文明圏としてくれるかどうかは問題だ。文明には生態と結びついた生産技術、灌漑技術のような文化もあれば、仏教のような生態やテクノロジーとは離

れた文化がある。そのどれを文明の基準とみるかで、情報と文明の関係がちがってくる。

しかし、日本語の語感として生態条件やこれと絡んだテクノロジーとかけはなした文化を文明と考えるのには抵抗があるように思う。

田中 高谷さんが「世界単位」で生態が非常に強いという場合は、この太線の生態を考えておられる。

嶋田 私もそう思う。ただこうも言える。森林は小さな部族が多数分布するような世界だが、乾燥地帯では部族あるいは民族の一つ一つの世界が非常に広い。ヨーロッパもある意味では森林の世界で、小世界が点在している。この意味で東南アジアとヨーロッパは似ていて、小さい世界単位がいくつも並立しやすい世界ではないかと思う。そういう意味では高谷さんの世界単位もよくわかる。

松原 ヨーロッパの進出は、近代システム形成というより入植運動だったという主張だったが、別の会合で入植問題をヨーロッパを中心に、アメリカとアフリカの比較を考えたことがある。アフリカで本格的な入植があったのは、南アぐらいしかないという説も出ていた。アフリカにおけるヨーロッパの入植運動が、どの程度のものだったのかを踏まえておく必要がある。

地域研究としては、「アフリカ」という地域概念の設定は有効なのかという問題もある。「西アフリカ」「東アフリカ」という設定の方が捉えやすいのか。一方には「地中海世

界」や「中東」という捉え方もある。そのクロスはどう考えるのが有効なのだろうか。

ユーラシアの乾燥地域からサヘルまでの連続性については、その中の違いを見過ごすことはできない。ユーラシア中央の乾燥地域は、生活する遊牧民の存在が農耕地帯と対応する中で、歴史を動かす内燃機関になっていたが、サハラではそういう役割にはならなかった。牧畜を考えた場合、歴史的に見て第一次地帯と第二次地帯に分ければ、アフリカに流れたものは第二次的なものだ。その大きな違いは、アフリカの牧畜はあまりにも牛に比重を置きすぎている。そこも関係して、サハラに置ける乾燥地域、特に牧畜を主とした生業が歴史に果たす役割は、ユーラシアの乾燥地域とは全く違うのではないか。

嶋田 ヨーロッパ人のアフリカへの入植運動がわずかだったことはたしかだ。しかし私が問題にしたのは、アフリカ人によるアフリカ内の入植運動というかフロンティアの開発だ。

そのうえで私はここではあえて、ヨーロッパ人の新大陸への入植運動も、フルベの湿潤サバンナへの進出も、東アフリカの開拓も、明・清時代の中国人の中国南部東南アジアへの進出も、ムガル帝国の時代も同じレベルで捉える試みをした。この枠組みの中では、むしろアフリカという枠を取り払い、文明は乾燥地帯を中心に湿潤地帯に広がるという、新しい世界史の捉え方を提示したつもりでいる。

ブローデルが地中海を一つの海の世界と考えている。ヨーロッパ人の考えでは、生態的に見ても地中海の北と南を一緒に扱うことには疑問があるだろうが、これを一つにして捉えたことが、ブローデルの革新的なところだと思う。同じようにユーラシアからサハラにかけての乾燥地帯に共通の基盤があり、一つの世界としてとらえてみても面白いように思う。それをどういう形で陣取りをするかは、政治の問題ではないかと思う。